

行列を用いた連立差分方程式の解法

宮澤和俊

1 行列の基礎知識

2行2列の行列とは、4つの実数を次のように配置したものを指す。

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{pmatrix}$$

i 行 j 列に配置された数 a_{ij} を、 (i, j) 成分という ($i, j = 1, 2$)。

同型の2つの行列 A, B の成分がすべて同じであるとき、 $A = B$ とかく。

[和, 差, 実数倍]

同型の2つの行列

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{pmatrix}$$
$$B = \begin{pmatrix} b_{11} & b_{12} \\ b_{21} & b_{22} \end{pmatrix}$$

について、和と差を次のように定義する。

$$A + B = \begin{pmatrix} a_{11} + b_{11} & a_{12} + b_{12} \\ a_{21} + b_{21} & a_{22} + b_{22} \end{pmatrix}$$
$$A - B = \begin{pmatrix} a_{11} - b_{11} & a_{12} - b_{12} \\ a_{21} - b_{21} & a_{22} - b_{22} \end{pmatrix}$$

実数 k について、

$$kA = \begin{pmatrix} ka_{11} & ka_{12} \\ ka_{21} & ka_{22} \end{pmatrix}$$

と定義する。

[積]

積 AB は、2行2列の行列になる。 AB の (i, j) 成分を、

$$a_{i1}b_{1j} + a_{i2}b_{2j}$$

で定義する。つまり、

$$AB = \begin{pmatrix} a_{11}b_{11} + a_{12}b_{21} & a_{11}b_{12} + a_{12}b_{22} \\ a_{21}b_{11} + a_{22}b_{21} & a_{21}b_{12} + a_{22}b_{22} \end{pmatrix}$$

左の行列 A については、横方向に成分を取り出す。

右の行列 B については、縦方向に成分を取り出す。

取り出した成分を順に掛け合わせ、それらの和を計算する。

注意. 行列の積は、一般的に、交換法則が成立しない ($AB \neq BA$)。

[単位行列とゼロ行列]

$$I = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$

を単位行列,

$$O = \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$$

をゼロ行列という.

任意の行列 A について,

$$AI = IA = A$$

$$AO = OA = O$$

が成り立つ. 数の世界における 1 と 0 に対応する.

[行列式と逆行列]

行列

$$A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$$

の対角線の積の差, $ad - bc$ を行列式という. $\det A$, $|A|$ などとかく.

$$\det A = ad - bc$$

ある行列 A に対して,

$$AX = XA = I$$

を満たす行列 X を, 行列 A の逆行列という. A^{-1} とかく. 数の世界における逆数に対応する.

すべての行列について逆行列が存在するわけではない. 2 行 2 列の行列については, 次の定理が知られている.

定理 1 (i) 行列式がゼロでないとき ($\det A \neq 0$), 逆行列が存在する. 逆行列は,

$$A^{-1} = \frac{1}{ad - bc} \begin{pmatrix} d & -b \\ -c & a \end{pmatrix} \quad (1)$$

である.

(ii) 行列式がゼロのとき, 逆行列は存在しない.

2 連立差分方程式

2 つの数列 $\{x_t\}, \{y_t\}$ について,

$$\begin{pmatrix} x_{t+1} \\ y_{t+1} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_t \\ y_t \end{pmatrix} \quad (2)$$

の関係が成り立つとする. 連立差分方程式 (連立 2 項間漸化式) という.

初期条件 (x_0, y_0) が与えられれば, 順に, $(x_1, y_1), (x_2, y_2), \dots$ が求められる.

$$\begin{pmatrix} x_1 \\ y_1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_0 \\ y_0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} ax_0 + by_0 \\ cx_0 + dy_0 \end{pmatrix}$$

$$\begin{aligned}
\begin{pmatrix} x_2 \\ y_2 \end{pmatrix} &= \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ y_1 \end{pmatrix} \\
&= \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \begin{pmatrix} ax_0 + by_0 \\ cx_0 + dy_0 \end{pmatrix} \\
&= \begin{pmatrix} a(ax_0 + by_0) + b(cx_0 + dy_0) \\ c(ax_0 + by_0) + d(cx_0 + dy_0) \end{pmatrix} \\
&= \begin{pmatrix} (a^2 + bc)x_0 + (a + d)by_0 \\ (a + d)cx_0 + (bc + d^2)y_0 \end{pmatrix}
\end{aligned}$$

表記を簡単にするため,

$$A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$$

とおくと,

$$\begin{aligned}
\begin{pmatrix} x_1 \\ y_1 \end{pmatrix} &= A \begin{pmatrix} x_0 \\ y_0 \end{pmatrix} \\
\begin{pmatrix} x_2 \\ y_2 \end{pmatrix} &= A \begin{pmatrix} x_1 \\ y_1 \end{pmatrix} = A^2 \begin{pmatrix} x_0 \\ y_0 \end{pmatrix} \\
\begin{pmatrix} x_3 \\ y_3 \end{pmatrix} &= A \begin{pmatrix} x_2 \\ y_2 \end{pmatrix} = A^3 \begin{pmatrix} x_0 \\ y_0 \end{pmatrix}
\end{aligned}$$

であることから,

$$\begin{pmatrix} x_t \\ y_t \end{pmatrix} = A^t \begin{pmatrix} x_0 \\ y_0 \end{pmatrix} \quad (3)$$

となるはず. つまり, 行列の t 乗を計算できれば, すぐに, 一般項 x_t, y_t が求められる.

以下では, 行列の性質を利用して, A^t を求める方法を説明する.

3 固有値と固有ベクトル

ある行列 A について,

$$A \begin{pmatrix} p \\ q \end{pmatrix} = \lambda \begin{pmatrix} p \\ q \end{pmatrix} \quad (4)$$

が成立するような実数 λ を, 行列 A の固有値という. 零ベクトルとは異なる $\begin{pmatrix} p \\ q \end{pmatrix}$ を, 行列 A の固有ベクトルという.

例

$$A = \begin{pmatrix} \frac{1}{2} & \frac{1}{4} \\ \frac{1}{2} & \frac{3}{4} \end{pmatrix}$$

とする. 上の関係式から,

$$\begin{pmatrix} \frac{1}{2}p + \frac{1}{4}q \\ \frac{1}{2}p + \frac{3}{4}q \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \lambda p \\ \lambda q \end{pmatrix}$$

すなわち,

$$\begin{cases} (\frac{1}{2} - \lambda)p + \frac{1}{4}q = 0 \\ \frac{1}{2}p + (\frac{3}{4} - \lambda)q = 0 \end{cases}$$

自明な解 $\begin{pmatrix} p \\ q \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ 以外の解を持つためには、2つの方程式が一致しなければならない。一致するための条件は、

$$\left(\frac{1}{2} - \lambda\right)\left(\frac{3}{4} - \lambda\right) - \frac{1}{4} \cdot \frac{1}{2} = 0$$

である。特性方程式という。整理すると、

$$\lambda^2 - \frac{5}{4}\lambda + \frac{1}{4} = 0$$

これを解くと、

$$\lambda = 1, \frac{1}{4}$$

を得る。

次に、固有ベクトルを求める。

(i) $\lambda = 1$ のとき、

$$-2p + q = 0$$

が得られる。この関係式を満たすすべての $\begin{pmatrix} p \\ q \end{pmatrix}$ が固有ベクトル。代表として、 $\begin{pmatrix} p \\ q \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix}$ とする。

(ii) $\lambda = \frac{1}{4}$ のとき、

$$p + q = 0$$

が得られる。代表として、

$$\begin{pmatrix} p \\ q \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \end{pmatrix}$$

とする。

まとめると、

$$A \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix} \tag{5}$$

$$A \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \end{pmatrix} = \frac{1}{4} \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \end{pmatrix} \tag{6}$$

が成り立つ。

[幾何学的意味]

座標平面上の点 (x, y) を、次のルールにしたがって、点 (x', y') に移動する。

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$$

この移動ルールを、1次変換という。一般的には、点がどの方向に移動するのか分からないが、1次変換には癖がある。たとえば、上の例では、点 $(1, 2)$ の移動先は点 $(1, 2)$ である。不動点という。点 $(2, 4)$ の移動先も点 $(2, 4)$ である。直線 $y = 2x$ 上の点はすべて不動点である。他方、点 $(-1, 1)$ の移動先は、点 $(-\frac{1}{4}, \frac{1}{4})$ である。原点方向に $1/4$ 倍縮小する。同じようにして、直線 $y = -x$ 上の点はすべて、原点方向に $1/4$ 倍縮小する。このように、特定の直線上では、原点方向の拡大や縮小という簡単なルールにしたがって点が移動する。特定の方向を示しているのが固有ベクトル、拡大・縮小の大きさを示しているのが固有値である。

4 行列の t 乗計算

前節の例を用いて、 A^t を計算する. (5), (6) 式で、両辺の左から A を掛けていくと、

$$\begin{aligned} A^t \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix} &= \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix} \\ A^t \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \end{pmatrix} &= \left(\frac{1}{4}\right)^t \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

が得られる.

行列の性質から、上の 2 本の式を、1 本の式にまとめることができる.

$$A^t \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ 2 & 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & -\left(\frac{1}{4}\right)^t \\ 2 & \left(\frac{1}{4}\right)^t \end{pmatrix} \quad (7)$$

他方、逆行列の定理から、

$$\begin{pmatrix} 1 & -1 \\ 2 & 1 \end{pmatrix}^{-1} = \frac{1}{3} \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ -2 & 1 \end{pmatrix}$$

この行列を、(7) 式の両辺の右から掛ける. 左辺は $A^t I = A^t$ になる. 右辺を計算すると、

$$A^t = \begin{pmatrix} 1 & -\left(\frac{1}{4}\right)^t \\ 2 & \left(\frac{1}{4}\right)^t \end{pmatrix} \frac{1}{3} \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ -2 & 1 \end{pmatrix} = \frac{1}{3} \begin{pmatrix} 1+2\left(\frac{1}{4}\right)^t & 1-\left(\frac{1}{4}\right)^t \\ 2-2\left(\frac{1}{4}\right)^t & 2+\left(\frac{1}{4}\right)^t \end{pmatrix} \quad (8)$$

が得られる.

(2) 式の差分方程式の解は、

$$\begin{pmatrix} x_t \\ y_t \end{pmatrix} = \frac{1}{3} \begin{pmatrix} 1+2\left(\frac{1}{4}\right)^t & 1-\left(\frac{1}{4}\right)^t \\ 2-2\left(\frac{1}{4}\right)^t & 2+\left(\frac{1}{4}\right)^t \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_0 \\ y_0 \end{pmatrix}$$

である.

[一般化]

まず、行列 A の固有値 λ_1, λ_2 を求める. 対応する固有ベクトルの代表を、 $\begin{pmatrix} p_1 \\ q_1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} p_2 \\ q_2 \end{pmatrix}$ とする.

$$\begin{aligned} A \begin{pmatrix} p_1 \\ q_1 \end{pmatrix} &= \lambda_1 \begin{pmatrix} p_1 \\ q_1 \end{pmatrix} \\ A \begin{pmatrix} p_2 \\ q_2 \end{pmatrix} &= \lambda_2 \begin{pmatrix} p_2 \\ q_2 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

これらから、

$$\begin{aligned} A^t \begin{pmatrix} p_1 \\ q_1 \end{pmatrix} &= (\lambda_1)^t \begin{pmatrix} p_1 \\ q_1 \end{pmatrix} \\ A^t \begin{pmatrix} p_2 \\ q_2 \end{pmatrix} &= (\lambda_2)^t \begin{pmatrix} p_2 \\ q_2 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

1 本にまとめると、

$$A^t \begin{pmatrix} p_1 & p_2 \\ q_1 & q_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} (\lambda_1)^t p_1 & (\lambda_2)^t p_2 \\ (\lambda_1)^t q_1 & (\lambda_2)^t q_2 \end{pmatrix}$$

最後に、両辺右から、

$$\begin{pmatrix} p_1 & p_2 \\ q_1 & q_2 \end{pmatrix}^{-1}$$

を掛ける（固有ベクトルが1次独立ならば、逆行列は存在する）。左辺は、 $A^t I = A^t$ となるので、

$$A^t = \begin{pmatrix} (\lambda_1)^t p_1 & (\lambda_2)^t p_2 \\ (\lambda_1)^t q_1 & (\lambda_2)^t q_2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} p_1 & p_2 \\ q_1 & q_2 \end{pmatrix}^{-1}$$

が得られる。

注意．固有値が1つしかないときもある（特性方程式が重解を持つとき）．虚数解のときもある．それぞれに解法がある（ここでは省略する）．